
凋落の夏、 (落胤)

上月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

凋落の夏、（落胤）

【Nコード】

N9337C

【作者名】

上月

【あらすじ】

家族との思い出なんて、いつだって曖昧だ。国語の授業中、生徒全員に配られた何も書かれていない作文用紙に、そう書き殴ってから、わたしはすぐに消しゴムでそれを消した。

(落胤)

家族との思い出なんて、いつだって曖昧だ。

国語の授業中、生徒全員に配られた何も書かれていない作文用紙に、そう書き殴ってから、わたしはすぐに消しゴムでそれを消した。まつさらな作文用紙に、薄黒く引き伸ばされたような鉛筆の薄い跡が残る。

教壇から教室内を見回している、国語科の先生を、わたしは真っ直ぐに睨みつけた。

なんだって今更、こんな幼稚っぽい作文を書かなければいけないのだ。わたしの家庭環境を知っておいて。そもそも家族愛なんかをテーマにした小説を載せた教科書を採用すること自体間違っているのだ。

作文用紙を力いっぱい引き裂きたい衝動をなんとか抑えながら、わたしは目の前の作文用紙に「家族との思い出・上木律子」とだけ書いて、他は白紙のままそれを提出した。

* * *

あの忌々しい母親から産まれさえしなければ、今頃こんな辛い思いはしていないはずなのに。

いや、違う。わたしが産まれてこなければ良かったのだ。

わたしは歯を食いしばりながら、昼休みにいつも通っている校舎の裏にある裏庭へと足を運んだ。

裏庭はいつも校舎の影に隠れているため、他の生徒はあまり寄り付かない、わたしにとっては好都合の場所だった。

ただ雑草が無雑作に生えているだけで、他には何も無い。

申し訳程度に何本か桜の木が立っているが、夏のこの時期はただ青々しい葉を生やしているだけで、なんの飾り気もない。一言で言えば、校内ではとりわけ殺風景な場所だ。

腐食の進んだ、頼りがいのなさそうなベンチに腰掛けて、先ほど自販機で買った水の入ったペットボトルを額にあてる。ペットボトルに浮かんだ水滴が額に移り、そのまま下へと流れていく。

母親さえいなければ。母親さえいなければ。わたしさえいなければ。

何度も同じ言葉を心の中で復唱してから、ようやくわたしは額からペットボトルを離し、キャップを外して中の水を口の中へ流し込む。

一滴の水が、口内へ入りきらず、唇から溢れ、口端を伝ってぽとり、と地面へ落ちた。

その瞬間、大量の水がどこからか流れ込んできて、その水はやがて大きな波となり、勢いよくわたしを呑み込んだ。

わたしは本能的に、ただ酸素を肺に送り込もうとして、両手両足を我武者羅にばたつかせながら、必死の思いで水面に顔を出す。

すると、一本の毛むくじらの手が、わたしの方へと伸びてきた。毛は黒く、腕全体を覆いつくして、指はなく、手のひらにはやわらかい肉球があった。爪が鋭く伸びている。

躊躇うことなく、わたしはその手を握った。

すると、重力に逆らうように体が計り知れない力で引つ張られ、かたく瞑っていた目を開くと、赤黒い壁に覆われた空間にわたしはいた。

「私のお陰で、お前は助かった」

混乱しているわたしの隣で、微かに笑いながら猫は言った。

猫の方をじっと見てみると、大きく鋭い瞳が、わたしを見返した。体は、濡れていない。どうしてか、息も切れていない。一体何が起こったのだろうか。この猫は、一体誰なのだろうか。

「おや、あれは何だろうか？」

必死で今の状況を把握しようとしているわたしを尻目に、猫はゆったりとした、ひどく暢気な口調で言いながら、空間の向こうを指差した。

猫の指の動きを追って、わたしも空間の向こうを見る。

そこには、見慣れた母親の姿と、知らない男の姿があった。男は母親を強姦し、鬨っている。

あまりの光景にわたしははっと息を呑んだ瞬間、男はうめき声をあげて消え、母親は一瞬のうちにして大きな腹をした、妊婦になっていた。

「あああああ」

母親は、悲痛な叫び声を上げながら、腹を抱えて悶えはじめた。

すると、股の間からどろどろと赤黒い、血のような液体が次々にあふれ出てくる。

「母さ、ん」

わたしは震える手を母親の方に伸ばしたが、足が竦んでここから動けない。

母親はなおも叫び、悶え苦しみ続けながら、震える足を精一杯に立たせて痛みに堪えようとしている。

それでも赤黒い液体は容赦なく母親の股からあふれ出し、腿を伝い地面にたどり着くと空間と一体になる。

そして、終盤を迎えるかのように、さきほどとは比べものにならないほどの大量の液体があふれ出すと、母親は見るも無残な骨と皮だけの姿になって、最後に小さな赤子を産み落とすと母親は男と同じように消えた。

赤子は元気な声で泣きながら、母を求めるように両手を振り回す。猫は隣で、大声で笑いながらさも愉快そうに両手を叩いては野次を飛ばしている。

わたしはいたたまれず、赤子の方へと駆け寄ろうと足を一步踏み出した瞬間、急に赤子を明るく赤い炎が覆った。

同時に、熱く、言葉では言い表せないほどの痛みがわたしを襲った。

「あああああ」

母親と同じように、わたしも悲痛な叫び声を上げる。

熱い。熱い。痛い。

わたしは地面を転げまわりながら、虫の息を吐く。

「これが、お前の望みだろう」

猫が、嘲笑を浮かべながらわたしを見下ろした。

どろどろと、皮膚がとけていくのがわかる。

違う、そうじゃない、と言い返そうとしたが、口を開くと叫び声しか出てこない。

「それじゃあ、さようなら」

猫は笑って、背を向けて赤黒い闇へと消えた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9337c/>

凋落の夏、 (落胤)

2009年3月24日12時06分発行